



Title	伝寂蓮筆六半切『古今和歌集』考
Author(s)	寺田, 伝
Citation	語文. 2017, 108, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伝寂蓮筆六半切『古今和歌集』考

寺 田 伝

一. はじめに

伝称筆者を寂蓮とする『古今和歌集』の古筆切としては、一般的に右衛門切が広く知られるが、本稿で取り上げるのは、小松茂美氏『古筆学大成』が「伝寂蓮筆古今和歌集切(二)」と分類する六半形の断簡である(以下、伝寂蓮筆切)。

その伝寂蓮筆切の本文について、はやく小松氏が「『基俊本』の面目を伝える一本」と指摘し、注目されてきた。基俊本とは、久曾神昇氏の『古今和歌集成立論』⁽³⁾の系統分類によれば、公稿本のなかでも最も早い段階である第一次本系統に属するとされている。ただし、その第一次本のなかで、ある程度まとまった伝本としては、

①ノートルダム清心女子大学蔵黒川文庫本(以下、黒川本)

②志香須賀文庫蔵伝後醍醐天皇筆本(以下、志香須賀本)

の二本しかなく、さらにいえば、①黒川本は、近代の転写本であ

り、かつ基俊本の本文は校合注記によって知られるのみである。また、同じく②志香須賀本についても、鎌倉後期の書写と推測されるが、その奥書によれば、本文は清輔本を底本として、基俊本・定家本によって校合が加えられているとのことである。

このように、現在、第一次本系統として位置づけられる基俊本は、純粋な本文を伝えているとは必ずしも言えず、それゆえに古筆資料にも目を向ける必要があると考える。

二. 伝寂蓮筆切について

伝寂蓮筆切は、もと綴葉装六半形の冊子本で、料紙は楮紙。大きさは、縦17・7 cm×横15・6 cm。一面は七行×十一行と不定で、和歌二行書き、詞書は和歌より二字ほど下げて書く。書写年代は、鎌倉初期から中期頃と推測される。『古筆学大成』では、わずかに四葉が掲載されるばかりであるが、それ以降に紹介された断簡等をあわせれば、かなりの数にのぼる。

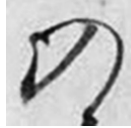
その一覽を示す前に、伝寂蓮筆切には、伝称筆者こそ違えども、もと同じ写本から切り出された、いわゆる異伝のツレの断簡がみられるので、触れておきたい。それは伝称筆者を慈円とする断簡で、『古筆学大成』が「伝慈円筆古今和歌集切（四）」と分類するものである（以下、伝慈円筆切）。

まず、伝慈円筆切の書誌を、『古筆学大成』に拠りながら確認したい。大きさは、縦17・2 cm×横15・2 cm。書写形式は、一面七行と十行のものがあるが、和歌二行書き、詞書は和歌より二字ほど下げて書いている。料紙については記載がないので不明であるが、次に示すように筆跡は同一のものと思しい。次表は、それぞれ同字が用いられている箇所を抜き出したもので、上段が「伝慈円筆切」、下段が「伝寂蓮筆切」である。

(a) 「の」 「伝慈円筆切」

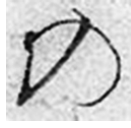


『大成』 241図



『大成』 242図

「の」 「伝寂蓮筆切」

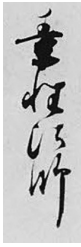


『大成』 85図

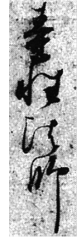


『大成』 86図

(b) 「素性法師」



『大成』 241図



『影印解説』 29図
(鎌倉・吉野時代)

(c) 「読人不知」



『大成』 241図



『大成』 86図

右掲のように、いずれのも大変癖のある字で、同筆の趣をみてとれるが、具体的に述べると、(a)「の」は、曲線が角ばり、墨が停滞している様子うかがえ、入筆が曲線から少々はみ出す傾向がみられる。また、(b)「素性法師」では、針をまげたような特徴的な連綿によって書かれている。あるいは、(c)「読人不知」では、「読人」に対して「不知」が小さく書かれている点なども、同一筆者による書き癖と認められよう。

以上、伝寂蓮筆切と伝慈円筆切とは、もと同じの写本から切り出された異伝のツレであることが認められてもよいと考える。当該断簡においては、ごくわずかな数ではあるが、このような筆者に関する異伝の問題は、今後とも整理がなされてゆかねばなるまい。さて、伝寂蓮筆切の一覽を示すと、以下の通りになる（歌番号は、『新編国歌大観』に拠る）。

②	①	No.	所載先	部立・歌番号	備考
『古今和歌集成立論』 132図	(鶴見大学図書館蔵)				
	恋二 560 作者 563 和歌		恋一 480 詞書 482 和歌		
	現久保木秀夫氏蔵				

②4	『平成新修古筆資料集 四』59図	大歌104左注ゝ106和歌	
②3	『古筆の楽しみ』3図	大歌102詞書ゝ102左注	
②2	『古筆学大成』87図	大歌102和歌ゝ107詞書	
②1	(個人蔵)	大歌101詞書ゝ102和歌	
②0	『古典籍展観大入札会目録』平成23年	雑牀108長歌ゝ106長歌	現鶴見大学図書館蔵
①9	(鶴見大学図書館蔵)	雑牀108長歌ゝ104和歌	
①8	『古筆学大成』86図	雑下995作者ゝ997作者	
①7	『思文閣墨跡資料目録』238号	雑下961作者ゝ962作者	
①6	(架蔵)	雑下956作者ゝ958作者	
①5	『古筆切影印解説Ⅰ』30図	雑下944和歌ゝ946作者	
①4	『思文閣墨跡資料目録』23号	雑上882和歌ゝ884詞書	
①3	『古筆学大成』242図	雑上880詞書ゝ881和歌	異伝
①2	『古筆学大成』85図	哀傷858詞書ゝ859作者	
①1	(久保本秀夫氏蔵)	哀傷巻頭829ゝ830和歌	
①0	(鶴見大学図書館蔵)	恋五807和歌ゝ809和歌	現鶴見大学図書館蔵
⑨	『古筆切影印解説Ⅰ』29図	恋五801作者ゝ802和歌	
⑧	(鶴見大学図書館蔵)	恋五762次異本歌ゝ766和歌	
⑦	『古筆学大成』241図	恋四720左注ゝ724作者	異伝
⑥	『思文閣墨跡資料目録』221号	恋四巻頭677ゝ679和歌	
⑤	『古筆学大成』84図	恋三672和歌ゝ676和歌	
④	『思文閣墨跡資料目録』216号	恋三643和歌ゝ645詞書	
③	『古筆手鑑披香殿 下』240図	恋二591和歌ゝ594和歌	

このように現時点では二十四点(丁面でいえば、約三十一面)の伝存を確認することができ、従来よりもその本文の性格を把握することが可能となったと考える。本稿は、この一覽を調査対象として、伝寂蓮筆切について考察してゆきたい。

三・部類名

それでは本文について検討を行いたい。個々の例については、すでに先学の指摘されるところもあるが、伝寂蓮筆切において、もっとも注目されるのは部類名である。幸いなことに、伝寂蓮筆切には、部類名を備えた断簡が二葉伝存しているので、以下に、まず断簡⑥の本文を掲げる。

○断簡⑥

古今和歌集卷第十四 七十二首

恋部四

題不知 読人不知

みちのくのあさかのぬまのはなかつみ

かつみるひとをこひやわたらん (677)

貫之

いそのかみふるのなかみちなかくに

みすはこひしとおもはさらまし (679)

ここで部類名が「恋部四」と記されているが、『古今和歌集成立論』によって諸本を参照するに、通行の定家本をはじめ「恋歌四」とあるのとは相違していることがわかる。なお、当該断簡で

678番歌を欠いており、諸本を参照しても、いずれの伝本に存するので誤脱と思いが、この点については後述したい。

つづいて、同じく部類名を伝える断簡⑪を掲げる。

○断簡⑪

古今和歌集卷第十六 卅五首

哀傷部

いもうとのみまかりけるとき

よめる

小野篁

なくなみたあめとふりなはわたりかは

みつまさりなはかへりくるかに (830)

左おほいもうちきみしらかはの

あたりにおくりけるよしを読む

この断簡⑪においても、先掲の断簡と同様、部類名が「哀傷部」と記されている。このことから伝寂蓮筆切が部類名を「恋部・四」「哀傷部」と記す伝本であったことが知られよう。『古今和歌集』における部類名の様相は、諸本によって実にさまざまな形式が認められるが、久曾神氏は、それらを大きく三種に分類しておられる。その分類を、私にまとめると次のようになる。

・初案部類名 春部上 春部下 夏部：(黒川本)

・再案部類名 春上 春下 夏：(私稿本・元永本)

・第三案部類名 春歌上 春歌下 夏歌：(志香須賀本・雅俗

山莊本・静嘉堂

本・雅経本・清輔
本・俊成本・定家
本)

伝寂蓮筆切の部類名は、これらのなかでも初案部類名のも的一致しているが、ここで注意したいのは、従来、この初案部類名とされる「春部上」「春部下」という本文は、あくまでも、黒川本の校合注記によつてのみ知られるばかりであったという点である(同じく基俊本の本文を伝えられる志香須賀本は、その部類名を「恋歌一」「恋歌二」と記す)。その意味で、伝寂蓮筆切が、その部類名に「恋部・四」「哀傷部」と本行本文として記していることは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌倉期において、実際に用いられていたことを証しているのである。それゆえに、ここに掲げた部類名を伝える断簡二葉の意義は大きく、また、伝寂蓮筆切と基俊本との関係の深さを窺わせるのである。

四・歌数

そして、この巻頭部を伝える断簡において注意されるのは、たとえば、「古今和歌集卷十四」「古今和歌集卷第十六」という内題の下に「七十二首」「卅五首」と各巻の歌数が記されている点である。伝寂蓮筆切はあくまで断簡であるため、その全貌を窺い知ることとはできないが、これらの記載から、各巻の歌の出入りを推知することも可能であろう。

まずは、断簡⑥の卷十四・恋四の歌数についてみてゆきたい。通行の定家本における卷十四の歌数は「七十首」であるが、その一方、断簡⑥においては歌数が「七十二首」と記されている。したがって、伝寂蓮筆切は、通行の定家本にはない異本歌を有していると推測できるが、諸本を参照するに、卷十四における異本歌は次のとおりである。

○異本歌(1)

そとをりひめのひとりゐてみかをと
こひたてまつりてひとりゐてよめる
わかせこかくへきよひなりさ、かにの
くものふるまひかねてしるしも

○異本歌(2)

みちしらはつみにもゆかむすみのえの
きしにをふてふこひわすれくさ

○異本歌(3)

まなつるのあしけのこまやなかぬしの
わかまへゆかはあゆみと、まれ
このように、卷十四には、異本歌が三首確認され、いずれも基俊本の本文を伝える黒川本・志香須賀本にみえる歌であるが、そのほか、俊成本の永暦二年本では(1)・(2)の歌が墨減されており、また、清輔本の諸本においては(2)・(3)の歌を有していることが知られる。

伝寂蓮筆切の歌数からすれば、右掲のいずれかの異本歌を二首

有していたとみられるが、ただし、先述したように伝寂蓮筆切は678番歌を欠いていたことには注意しておきたい。この欠落は諸本を参照するに、伝寂蓮筆切の誤脱とみられ、仮にその一首を補えば、伝寂蓮筆切も右掲の三首を有していたと考えられる。

つづいて、断簡⑪の卷十六・哀傷の歌数「卅五首」について、通行の定家本において卷十六は「三十四首」であり、伝寂蓮筆切はおそらく異本歌を一首有していたと推測される。そこで諸本をみるに、卷十六の異本歌は次の一首が確認される。

○異本歌

諒闇のとし冷泉院のさくらをみてよめる

尚侍広井女王

こ、ろなきくさきといへとあはれなり

ことしはさかすともにかれなん

この歌は、基俊本の本文を伝える志香須賀本のみが有する異本歌であることが知られる。一方で、黒川本に何も記されないことは不審としかいいようがないが、ただし、久曾神氏も述べておられるように、基俊本の本文を示した黒川本の校合注記には、脱落も少なからず見受けられるようである(実際に、卷十六以降にかけて、異本歌の注記は少ない)ので、本来は基俊本に存していた歌とみておきたい。

以上、巻頭を伝える断簡に記された歌数から、各巻の歌の出入りについて検討したが、それによって想定できる歌の出入りにおいても、伝寂蓮筆切は、基俊本にみえる異本歌を同様に有してい

たと考えられるのである。

五・異本歌

さらに、伝寂蓮筆切には、実際に、異本歌を有する断簡が二葉伝わっている。まずは、断簡⑧を掲げたい。内容は、巻十五・恋五の部分で、本文は以下のようになっている。

○断簡⑧

としふれは心やかはるあきの夜の

なかきもしらすねしやなとき

わかそてにまたきしくれのふりぬるか

人の心にあきやたつらむ

山のゐのあさき心もおもはぬを

かけはかりのみ人のみゆらん

わすれくさたねとらましをあふことの

いとかくかたきものとしりせは

こふれともあふこのなきはわすれくさ

ゆめちにさへやおひしけるらん

(766)

(異本歌)

(763)

(764)

(765)

この断簡⑧の一首目「としふれは」の歌は、いうまでもなく通行の定家本にはないが、この異本歌を有している伝本は比較的多く見受けられ、諸本においては、黒川本・志香須賀本をはじめ、清輔本の諸本が有していることが知られる。

また、次にもう一首、異本歌を有する断簡⑮を掲げる。内容は、巻十八・雑下の部分。

○断簡⑮

山さとはものわひしかることこそあれ

よのうきよりはすみよかりけり

しら雲のたえすたなくみねにたに

すめはすみぬるよにこそありけれ

多治比安任

さはきなき雲のはやしにいりぬれば

いと、うきよのいとはる、かな

布留今道

(異本歌)

(944)

(945)

この断簡⑮の三首目「しら雲の」の歌は、通行の定家本をはじめとして無いが、諸本を参照するに、基俊本の本文を伝える志香須賀本が有していることが知られる。

このように伝寂蓮筆切には、異本歌を有する断簡が伝わっており、その異本歌はいずれも基俊本の本文を伝える黒川本あるいは志香須賀本にみえることから、異本歌という点においても、伝寂蓮筆切が、基俊本と近似していることが知られるのである。

六・本文異同

つづいて、伝寂蓮筆切の本文異同についてみてゆきたい。まず、伝寂蓮筆切と、定家本とを比較して、そこで見出された異同本文と一致する諸本の例をまとめると、後掲の【本文異同表】のようになる。

その一覧によって、全体的な傾向を俯瞰してみると、全四十三例中、最も一致するのが、志香須賀本の二十一例で、つづいて一致をみせるのが、黒川本の十九例である。これによって、おおむね伝寂蓮筆切が基俊本と親近性があることが認められ、もって、伝寂蓮筆切を第一次本系統に位置づけてよいと考える。

また、それとほぼ同数の一致をみせているのが、清輔本のなかでも天理本の十九例、永治二年本の十八例、前田家本の十七例、寛親本の十六例である。このような清輔本との一致数の高さは、先行研究において、小松茂美氏が「清輔本」とも酷似する^⑤とされ、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している^⑥」と指摘される所以であろう。

しかしながら、前述してきた部類名や異本歌の出入りなどを勘案すれば、必ずしも清輔本とは認めがたく、また、伝寂蓮筆切と清輔本との間においてのみ共通して異文が生じる例も見受けられないことは、やはり、伝寂蓮筆切と清輔本との距離を感じさせる。むしろ、そのような共通異文の例は、黒川本や志香須賀本との間に多く確認され、伝寂蓮筆切と基俊本とがより密接な関係を持っていることが窺われるのである。

とはいえ、伝寂蓮筆切が、黒川本が示す基俊本の本文とは相違する例も多数見受けられる。なかでも鋭く対立する断簡⑯の本文を抄出して掲げる。

○伝寂蓮筆切（断簡⑯）

よをすて、山にいるひとやま
にてもなをうきときはいつち
ゆくらむ

（956）

○黒川本

よをうしとやまへいる人やまに
てもなほうきときはいつちゆく
らむ

ものおもひ侍れるときい
とけなきこを見てよめる

又、よをすて、やまにい
る人山なから又うきとき
はいつち行らむとも
ものおもひはへりける時
いときなきこをみてよめる

ここで黒川本が校合によって示す基俊本の本文に傍線部を引いたが、956番の左注において、黒川本が「又、よをすて、やまにいる人」と基俊本にあったと注記するにもかかわらず、伝寂蓮筆切にはそのような本文は無い。このように黒川本と伝寂蓮筆切とが対立をみせる例は、細かな異同も含めると、およそ五〇例ほど数えられ、伝寂蓮筆切の本文が、黒川本が伝える基俊本とは、幾分異なった性格であると判断されるのである。

さらに、伝寂蓮筆切は独自異文も多くみられ、実に四十一例を数える^⑦。このような例をみるにつけ、伝寂蓮筆切は、確かに第一次本系統に位置づけられるものの、基俊本の本文をそのままに伝えているとみるのは控えておくべきであろうと考える。

以上、細かな本文異同について検討した結果、おおむね基俊本との近い関連性が認められるが、その本文を伝える黒川本や志

香須賀本のいずれかに収束されることはなかった。もちろん、それは写本という性質上、伝来の過程において他系統と接触したことが想起されてしかるべきであろうし、また、それは基俊本の本文を伝える黒川本や志香須賀本における問題でもあるようにも思われる。

ただ、これまで述べてきたように、伝寂蓮筆切が、部類名や歌の出入りといった大きな枠組みにおいて、基俊本と一致をみせていたことは、なお注目してあまりある。今後、基俊本という伝本の性格をより一層明らかにするためにも、伝寂蓮筆切の新たな出現が期待されるのである。

七. 書式

最後に、伝寂蓮筆切にみられる特徴的な書式について述べたい。伝寂蓮筆切の書誌は、先掲の通りであるが、詞書も二行に書写するといった特徴も見受けられる。ここで、『古筆学大成』に所収される断簡⑫を、その書式にあわせて翻刻すれば次のようになる。

なりにけるによみておきて
みまかりにける

こゑをたにきかてわかるゝたまよりも
なきとこにねむきみそかなしき (858)

やまひにわつらひはへりける秋
心ちのたのもしけなくおほえけ

れはよみてひとにつかはし
ける

大江千里

右のように、伝寂蓮筆切では、859番の詞書が二行に分けて書写されている。このような書式は、おそらく和歌が二行に書写されるのにあわせて詞書の形式も統一させたものかと考えられるが、『古今和歌集』の諸本をみても、まず確認できない特殊な様式であるように思われる。写本であるがゆえに、親本の本文ばかりでなく、その書式も継承されることが当然あってもよいと思うのであるが、以下に管見に入った同一の書式の資料を示し、その本文について簡潔ながら述べたい。

(一) 真田本『古今和歌集』下帖

現在、長野県の実田宝物館には真田本と称する『古今和歌集』が所蔵されている。この真田本については、西下経一氏『古今集伝本の研究』、久曾神昇氏『古今和歌集成立論』では紹介されており、その後、滝沢貞夫氏によって報告された伝本である。

いまその論考よって、真田本を概観したい。真田本は、綴葉装の上下二帖であるが取り合わせ本で、それぞれ別種のものである。ここで対象とするのは下帖である。大きさは、縦16・0 cm×横15・2 cmの六半形で、料紙は鳥の子紙を用いており、書写年代は、鎌倉初期頃と推測されている。そして次に示すように、伝寂蓮筆

切と同じく、詞書を二行に分けて書写している。⁽⁹⁾

たちかへりあはれとそをもふよそにて
も人にこゝろを、きつしらなみ ⁽⁴⁶⁴⁾

紀貫之

よのなかはかくこそありけれ吹風
のめにみぬ人もこひしかりけり ⁽⁴⁶⁵⁾

右近の馬場のひをりのひむかひ
にたてたるくるまのしたすた
れよりをんなのほのかに見えて
ければよみてつかはしける

このように真田本も、伝寂蓮筆切と同じく詞書を二行にわけて書写している。その本文について、滝沢貞夫氏は「平安時代の流布本といわれる基俊本・元永本に近く、清輔本・本阿弥切とも共通の要素を持つ注目すべき本文である」と述べておられる。

また、その本文中には次のような異本歌もみられる。

○異本歌(1)

おちたきつかはせにうかふうたかたも
思はさらめや恋しきことを

○異本歌(2)

いぬかみやとこのやまなるいさらかは
いさとこたゑてわかなもらすな

此歌或人天智天皇の近江の采女に
給けるとなむいひつたえたる

諸本を参照するに、(1)は、基俊本の本文を伝える志香須賀本をはじめ、元永本・清輔本の諸本にみえる歌で、(2)は黒川本・志香須賀本・元永本にみえ、俊成本では墨減される歌である。真田本は、右の二首以外には異本歌を有していないものの、伝寂蓮筆切と同じ書式であった真田本に、同じく基俊本の本文との近似性や、異本歌が看取されることはなお注意されよう。

(二) 伝九条兼実筆六半切

また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九条兼実筆六半切があげられる。『古筆学大成』では「伝九条兼実筆切(一)」と分類される断簡で、もと六半形の冊子本、大きさは縦15・1 cm×横14・9 cm。『平成新修古筆資料集』第一集⁽¹⁰⁾においても紹介されており、書写年代は、鎌倉初期と推測されている。そこで紹介された断簡もやはり次のような書式をとっている。

はせたまひける御返事
たてまつりける

伊勢

ひさかたのなかにそひたるさとなれば
ひかりをのみそたのむへらなる ⁽⁹⁶⁸⁾

きのとしさたかあはのかみにまかり
ける餞せんとてけふいひつかは
したりけるにこゝかしこにまかり
ありきてよるまでまうてこさ

りければよみてつかはしける

業平朝臣或本

伝九条兼実筆切の本文系統については、断簡の伝存数が少ないために判然としない部分もあるが、なかでも注意されるのは、『古筆切影印解説Ⅰ古今集編』に所収の断簡である。卷十六哀傷の巻頭を伝えているが、その二行を示せば次のようになる。

古今和歌集卷□十六（或本）三十五首
或本三十四首

哀傷

これは先にみた伝寂蓮筆切の断簡①と同じ箇所、部類名こそ「哀傷」と異なるものの、内題の下に記される歌数には「三十五首」とあって、伝寂蓮筆切と一致していることが知られる。すなわち、この伝九条兼実筆切においても、広井女王詠の「こころなき」という異本歌を存していたと考えられるのである。

以上のように、伝寂蓮筆切にみられる書式から、それと同様の形式をもつ資料について概観したが、詞書（あるいは左注）を二行に分ける書写形式をもつ伝本は、いずれも基俊本の本文を少なからず有していることが想定される。もちろん、相互に対立する例も見受けられ、各々の資料の具体的な位置付けについてはより詳

細な検証が必要であるが、いずれも平安期以来行われていた『古今和歌集』の本文を伝えているとみてよく、基俊本と称される伝本の受容を考える上で、重要な資料となり得るであろうと考える。

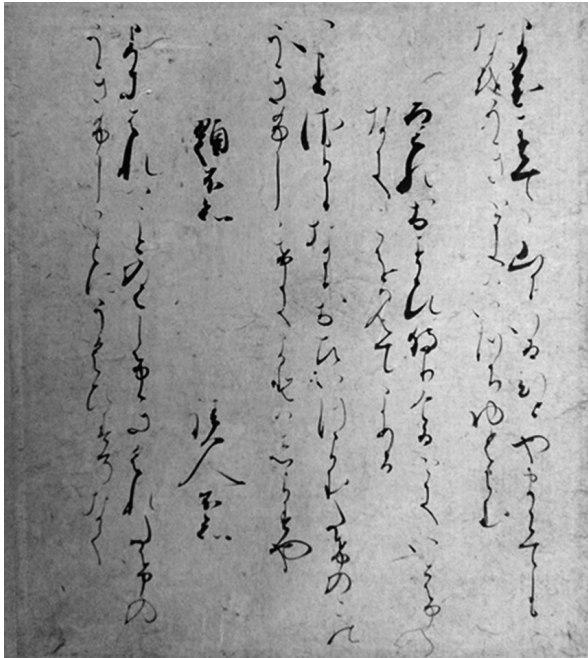
八・おわりに

本稿では、伝寂蓮筆切について考察してきたが、その本文系統は、部類名や異本歌の出入り等から、第一次本に位置づけられることが認められる。とりわけ、黒川本の注記によってのみ知られた基俊本の本文を、自身のものとして伝えていることは貴重である。

しかしながら、その一方で黒川本と対立する例もみられ、伝寂蓮筆切が基俊本をそのままに伝えているとみえることは残念ながらできない。したがって、現状では、新たな資料の出現を待つよりほかないが、その基俊本の本文を伝える可能性がある資料を、書式の類似性から指摘した。

鎌倉期においては、今日のように定家本が一般に流布していたわけでは決してなく、依然として平安期以来の本文が行われていたことはよく知られるが、それにもなつて人々は様々な証本を求めて、各種校合がなされたことは想像に難くない。そのなかで基俊本が一証本として存在したことを、伝寂蓮筆切や真田本・伝九条兼実筆切を通して、垣間見ることができないのかと考えるのである。

【図版】断簡⑬



【本文異同表】

No.	1	2	3	4
歌番号	480	481	482	561
伝寂蓮筆切	わひしきは	躬恒	歌	作
定家本	あやしきは	凡河内みつね	こひ渡哉	紀とものり
断簡と一致する諸本	元	黒元後	元	

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
1074	1072	1011	1006		1005	1003	995		962	961	957		884	883		880		859		858	829	807	763	722	677			672		645	644	592	
詞	歌	作	歌	歌	歌	歌	作	詞	詞	作	詞	詞	詞	歌	歌	詞	詞	詞	詞	詞	作	歌	歌	歌	歌	歌	歌	詞	詞	詞	詞	歌	
とり物歌	神楽歌	神あそひの歌	ねてのあしたの	みやのうちに	すこしつるかな	ときちらし	やまおろしも	とよまおろしも	読人不知	ちりにつけてや	小野篁朝臣	いとけなきこを	月	ゆかしかりける	きたらぬさと	きたらぬさとは	よみて人に	心ちのたのもしけなく	よみておきて	なりけるに	小野篁	人	はうらみし	うはなみはたて	うはなみはたて	かつ見るひとを	かくすとすれと	みつあさみ	とき	まかりける	かにのつかひに	ねさしとめらぬ	
とりもの、うた	神遊ひのうた	ねてのあさけの	よみ人しらす	宮のうちは	すくしつる哉	ときちらし	こきちらし	さくらし	ナシ	ちりにつけとや	たかむらの朝臣	いとけなきこを	月	こひしかりける	きたらぬさと	きたらぬさとも	よみて人のもとに	心地たのもしけなく	よみておきて	なりける時	小野たかむらの朝臣	世をほうらみし	君か心に	あたなみはたて	かつ見る人に	かくるとすれと	水をあさみ	時	まかりたりける	ナシ	人にあひて	ねさしと、めぬ	
黒	黒任	元	志黒元水前天後	志	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	元	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後	志黒元水前天後

43	42	41	40	39
1086	1085	1084	1083	
歌	歌	歌	歌	青柳の
あふみちの	いさこのかすは	みの、国歌	ぬふといふ	
	あふみのや	まさこのかすは	ぬふてふ	あをやきを
			みの、うた	後
				志六永前天雅曆建
				志黒元俗六寛永前天建忠
				黒俗六寛永前天後雅曆建任
				俗六寛永前天後雅忠

注

- (1) 小松茂美『古筆学大成』第四卷（講談社、平成元年）
- (2) その後、久保木秀夫「本文データベースの二問題点と異本研究の可能性—古今集の異本・異文を例として—」（秋山虔編『平安文学史論考』武蔵野書院、平成21年）および鶴見大学第138回貴重書展「収書の真髓」（久保木氏解説、平成26年）などに言及があるが、これまでまとまった報告はなされていない。
- (3) 久曾神昇『古今和歌集成立論』（風間書房、昭和35～36年）。以下、引用する『古今和歌集』の諸本は、同書資料編による。なお、伝公任筆本については、小松茂美編『伝公任筆古今和歌集』（旺文社、平成7年）によった。
- (4) 既に指摘があるが、志香須賀本の異本歌は、次のような本文をとっており、伝寂蓮筆切と相違しているので注意が必要である。
- 雲林院にてよめる（惟喬御子）
- さはきなきくものはやしにいりぬれは
- いと、うきよのいとはる、かな
- (5) 注（1）解説。
- (6) 田中登『平成新修古筆資料集』第四集（思文閣出版、平成20年）
- (7) なお、独自異文であるため取り上げなかったが、Ⅲ番の詞書には「滑稽歌 誹諧歌」とあり、諸本においてはいずれも「誹諧（歌）」とのみ記している。だが、黒川本によれば基俊本には「東

宮切韻同作、各滑稽」という勘物があつたことが注記されており、伝寂蓮筆切の独自異文である「滑稽歌」もそのような勘物に影響を受けたものかと推測される。

- (8) 滝沢貞夫「真田本は古今集の古証本か」（『国文学言語と文芸』6巻4号、昭和39年7月）。なお、『古今集校本』（笠間書院、昭和52年）において「真」とするもの。

- (9) 国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。

- (10) 田中登『平成新修古筆資料集』第一集（思文閣出版、平成12年）

- (11) 久曾神昇『古筆切影印解説Ⅰ古今集編』（風間書房、平成6年）

〔付記〕

資料の閲覧・翻刻にあたっては特別なご配慮を賜りました、鶴見大学図書館ならびに久保木秀夫氏に深く御礼申し上げます。

（てらだ・つたう 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）